

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：32636

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K01326

研究課題名（和文）現代中国の政治エリートのキャリア形成と思想発展

研究課題名（英文）Career Formation and Ideological Development of the Political Elite in Contemporary China

研究代表者

鈴木 隆（SUZUKI, Takashi）

大東文化大学・東洋研究所・教授

研究者番号：50446605

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、中国共産党の政治エリートの形成過程を思想と行動の両面から検証した。事例研究の対象として、中華人民共和国の最高指導者である習近平について、約25年間の長きにわたる地方指導者時代（1985～2002年）と、第二期胡錦濤政権の一員として中央指導者の要職にあった5年間（2002～2007年）に、習近平がいかなる政治的実績を残したのか、異なる任地と職位における政治認識や政策論、リーダーシップの特徴とその変化、それらと総書記就任後との連続性や断絶性はどうか、毛沢東、鄧小平、江沢民、胡錦濤の前任指導者たちとの共通点や相違点はどうか、などの問題を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の主要な意義として次の2点が挙げられる。第一に、従来の制度論中心の研究史の流れに対し、それを前提としつつも、中国政治の現状に即した人物研究復権の必要性を促した。第二に、国政のトップになる前の習近平の政治的履歴を探ることは、習近平の有力な後継候補であるサブリーダーたち、とくに、地方指導者時代から習近平に付き従ってきた側近集団の理解の一助となる。習近平という政治家の発展過程の考察は、過去から現在への連続と変化の検証だけでなく、中国政治の未来の展望にも寄与する。習近平とその後継者による「広義の習近平時代」の特徴を推察するうえでも、本研究は価値を有する。

研究成果の概要（英文）：This research examines the formation process of the Chinese Communist Party's political elite in terms of both ideology and behavior. The case study focuses on Xi Jinping, the supreme leader of the People's Republic of China. It discusses the following questions: 1) What were Xi's political achievements during the period of local leadership (1985-2002) and during his five years in the key posts of central leadership as a member of the second Hu Jintao administration (2002-2007); 2) What were the characteristics and changes in his political awareness, policy theories, and leadership in different positions, and what was the continuity or discontinuity between these and after he became CCP general secretary; 3) What were the similarities and differences with the previous leaders of Mao Zedong, Deng Xiaoping, Jiang Zemin, and Hu Jintao.

研究分野：政治学

キーワード：中国政治 中国共産党 政治エリート 習近平 毛沢東 鄧小平 胡錦濤

1. 研究開始当初の背景

周知のように、中国では共産党の一党支配が成立している。だが、カリスマ指導者であった毛沢東と鄧小平の死後、「人治」の要素が薄れ、江沢民と胡錦濤の時期には、政治的意思決定の法制化と参加の部分的拡大(「法治」)が進展しているとの見方が、学界の共通認識であった。しかし、そうした現実的・学問的潮流は、2010年代に入り、習近平によって覆されることとなった。今日では、法治から人治への「逆コース」現象が強まっている。2012年に党総書記に就任して以来、習近平は、党・国家・軍において、自身への個人集権に邁進している。この結果今日では、習近平一強体制のもと、鄧小平時代から漸進的に整備されてきた最高指導部の集団指導体制は、もはや形骸化している。その代表例は、権力継承ルールの大胆な変更である。2018年3月、習近平指導部は憲法改正を断行し、国家主席の連任制限を撤廃した。習近平は、終身の国家主席となることも原理的に可能となった。このことは、従来の制度論中心の研究史の流れに対し、それを前提としつつも、中国政治の現状に即した人物研究復権の必要性を示唆している。

2. 研究の目的

以上のような背景にかんがみ、本研究では、中国政界での影響力を今後も長期的に維持する見込みが高い習近平について、約25年間の長きにわたる地方指導者時代(1985~2002年、任地は河北省、福建省、浙江省、上海市)と、第二期胡錦濤政権の一員として中央指導者の要職にあった5年間(2002~2007年)に、習近平がいかなる政治的実績を残したのか、異なる任地と職位における政治認識や政策論、リーダーシップの特徴とその変化、それらと総書記就任後との連続性や断絶性はどうか、毛沢東、鄧小平、江沢民、胡錦濤の前任指導者たちとの共通点や相違点はどうか、などの問題を考察する。今日の国際社会で、権威主義的支配の代表格とされる中国について、最高指導者を事例として、謎多きトップリーダーの政治的成長の過程を、下級指導者時代のキャリア形成にまで遡って全面的に検討する。

3. 研究の方法

本研究の方法は、政治史の人物研究や政治評伝の伝統的な形式に則ったものである。本研究のテーマに関連する一次資料、とくに文献資料を可能な限り広く蒐集し、文章を丹念に読み込み、データを地道に整理解析して、習近平その人と中国の支配体制の「実像」を、資料に依拠しつつ、独自の解釈に基づいて再構成することである。

方法的にみた場合、本研究は、中国政治エリート研究における資料基盤の拡大とその方法的革新の意義も有する。すなわち、毛沢東、鄧小平、江沢民、胡錦濤の歴代指導者とは異なり、習近平には本人名義で公刊された複数の著書をはじめ、地方指導者時代に発表した個別の文章が相当数あり、しかもその一部が、データベースなどで比較的容易に利用可能である。これにより、30年余りに及ぶ習近平の思想形成と活動歴について、実証的かつ系統的な分析が可能である。

この理由はひとえに、国政の重要会議の定例化や部分的な情報公開の義務化など、改革開放政策の進展に伴い、政治・行政の制度が整備され、そうした時代の歩調と合わせて習近平が出世の道を行んだこと、さらに、習近平世代以降の指導者が過去に発表した多くの文章や記録の整理保存と公開(非公開の決定を含め)が、技術的に可能になったためである。この結果、文書の収集に始まり、文言の事後的改作の検証を中心とする史料批判などに多くの手間と時間を費やさざるを得なかった、我々の先輩研究者たちによる毛沢東や鄧小平の研究に比べて、資料環境は格段に向上した。そうした状況を踏まえれば、習近平だけでなく、習近平に続く次代の政治指導者、政治エリートを研究するに際して、それらの人々の「下積み」時代の言動さえも、資料に即して実証的に分析できるようになったことの意義は極めて大きい。

4. 研究成果

本研究では、政治家としての連続と変化の両面を念頭に置きながら、地方指導者時代(1985~2002年)と、2012年に党総書記に就任する前までの中央指導者時代(2002~2007年)の習近平を分析した。本研究で得られた主な知見は以下のとおりである。

(1) 「アマルガム」の指導者

最高指導者としての習近平は、本人が自覚しているか否かにかかわらず、中国共産党の歴代指導者から多くのものを引き継いでいる。各リーダーからの継承内容は、大略、次ページの表1のようにまとめられる。

こうしてみると習近平は、「継承、発展」をモットーとする保守主義の指導者であり、いわゆる経路依存性(path dependence)傾向の強い人物といえる。建国の父である毛沢東からは、「屈辱の近代」の歴史的復仇としての「社会主義現代化強国」の実現という長期目標を受け継いだ。実際の国政運営の面では、とくに江沢民との政策的類似性、共通性が目を引く。

(次ページに続く)

表1 習近平と歴代の中国共産党指導者の政治的共通性

	習近平の政治論を構成する基本要素、政策内容	共有要素
毛沢東	・政治活動の基本理念、権力観、組織・イデオロギー論 ・「屈辱の近代」の復仇としての「社会主義現代化強国」の実現	・大国志向の発想 ・「強い中国」の希求 ・「中国の独自性」の重視
鄧小平	・発展観、近代化と改革の抽象的方法論	
江沢民	・国家の発展目標と統治技術の骨格 -ビジョン: 「中華民族の偉大な復興」、「二つの百周年」 -達成手段: 中国的法治(「依法治国」)、ナショナリズムの動員	
胡錦濤	・社会変化に適応した政策的肉づけ -「科学的発展観」、「調和の取れた社会」志向の経済社会政策	

出所:筆者作成。

国家目標の「中華民族の偉大な復興」、政治的スケジュールとしての「二つの百周年」(1921年の党創立百周年と1949年の建国百周年)への着眼、統治におけるナショナリズムの積極動員などは、江沢民期よりもさらに大きな意味合いをもって、習近平の施政に引き継がれ実行されている。

半面、これを言い換えれば、**表1**に記されていないその他の事項、例えば、外交、安全保障政策は、現在、最高指導者の地位にある習近平にとっては、みずからの名を歴史に残すための数少ない、オリジナルな手腕が発揮できる分野であり、それゆえに譲歩しにくい部分でもある。とくに「歴史」、「海」、「軍」、「台湾」などへの強いこだわりを有する。

ただし当然のことながら、国家のトップになる前の習近平にとって、外交と呼びうる活動はもっぱら地方行政機関同士の経済協力や友好活動に限られ、先の4つのトピックも本質的に国内問題として発想されていた。こうした長期にわたる思考の慣性が、今日、海洋権益や地域安全保障をめぐる習近平の発言のなかに、ときに露骨なまでの内政優先、国益重視の態度がみられる一因であろう。歴史、海、軍、台湾については、中国の最高指導者として、ローカルに発想してグローバルに行動している可能性が高い。

むろん、前任者の意欲と実践が放棄された事柄も多い。代表例は、鄧小平と胡錦濤を中心に推進された党内民主主義の拡充策である。毛沢東と文革の反省に基づき、鄧小平が重視した集団指導体制と個人崇拜禁止の原則は、事実上、反故にされた。2007年の17回党大会の開催前に、党総書記であった胡錦濤が導入し、ほかならぬ習近平その人が胡錦濤の後継候補に指名されるうえで大きく貢献した、第17期中央政治局委員の候補者選出をめぐる意向投票(予備選挙)も廃止された。

(2) 「中華」意識の肥大化と内発的独自発展観の教条化

表2には、地方指導者時代以来、現在(本文執筆の2024年6月4日時点)までに、習近平の政治認識に一貫してみられる持続的要素を抽出、整理した。

表2 地方指導者以来の習近平の政治認識の持続的要素(1982~2024年)

(1) 政治認識と政治信条の基礎 中国の歴史、文化、伝統の重視 ・「屈辱の近代」、中国近代史の対外的不名誉への怒り ・中国共産党史と中華人民共和国史の顕彰(例、革命記念館や歴史博物館の建設、任地の歴史大事記、地方志的書物の刊行) 保守主義、内発的独自発展観 ・発展の競争相手に対する「場」のもつ独自性と固有性の強調(各地方任地から中国国家への「場」の変移)
(2) 追求すべき国家目標と重視すべき政策課題 共産党の支配体制のもとでの強国化の実現 反腐敗、綱紀粛正の厳格化 思想、イデオロギー統制の強化 主として、経済社会分野での長期計画の策定と実行(例、アモイ「1985-2000年 厦門経済社会発展戦略」、福州「3820工程」、浙江「8・8戦略」) 都市と農村、沿海部と内陸部などの各種格差の是正、それへの持続的な問題意識(例、「共同富裕」) 台湾統一の推進

出所:筆者作成。

表2のうち、(1)の と は、互いに緊密に関連している。

第一に、中国の歴史と文化、伝統の重視について、初の地方任地である河北省正定県以来、習近平はその後の赴任先でも、当地の歴史記念施設の整備、重要史跡への表敬訪問、歴史大事記類の編纂などを実行した。地方指導者時代から続く「歴史」への思い入れは、党総書記になっても変わらない。2021年7月の党創設百周年に際し、習近平が行ったいくつかの事績は、地方指導

者時代からの同様の政治行動の延長線上に位置づけられる。例えば、2021年11月の19期6中全会で採択された「第三の歴史決議」をはじめ、習近平の主導のもと、2019年から2022年にかけて、歴史文化研究とその資料保存、展示を担う3つの大規模国家機関（中国社会科学院中国歴史研究院、中国共産党歴史展覧館、国家版本館）が創設された。

第二に、「場」のもつ独自性と固有性を重視する習近平は、欧米型の発展モデルの踏襲を断固拒否し、中国の内発的な独自発展の見方に執着する。2022年の20回党大会の政治報告で、習近平が今後の中心任務として提起した「中国式現代化」の考えは、その典型といえる⁽¹⁾。それは、天安門事件ののち、1990年に赴任した福建省の福州市時期以降、30年以上に及ぶ習近平なりの政治的な思索と実践の到達点でもある。

ある国がどのような現代化の道を選ぶのかは、その歴史と伝統、社会制度、発展条件、外部環境などの諸々の要素によって決定される。国情が違えば、現代化の経路も異なる。実践が証明しているように、現代化に向けた国家の発展は、現代化の一般的法則に従わなければならないと同時に、よりいっそう当該国家の現実に合致し、その特色を備えなければならない。中国式現代化は、各国の現代化の共同の特質を有すると同時に、よりいっそう中国の国情の際立った特色を有する。（中略）新中国成立後、とくに改革開放以来、われわれは数十年の時間を費やして、西側の先進国が数百年かけて歩んできた工業化の歴史的過程の歩みを完了した。そして、経済の急速発展と社会の長期安定の奇跡を創造し、中華民族の偉大な復興のために広々とした未来図を切り拓いた。実践が証明しているように、中国式現代化は、（中略）強国建設と民族復興の唯一の正しい道なのである。⁽²⁾

(3) 指導力発揮の強みと弱み

毛沢東や鄧小平と違って、現在でもなお、カリスマなき一般的な強権指導者にすぎない習近平が、2012年当初の名目的な「最高指導者」から出発して、度重なる権力闘争に勝利し、毛沢東や鄧小平とならぶ「最高実力者」として、十年以上に及ぶ長期政権を樹立できた理由とはなにか。その「強さ」の秘密はどこにあるのか。

本研究の総括として、政治家の備えるべき最重要の要素、すなわち、強運と権力への断固たる意志のほかに、ここで改めて一つだけ挙げるとすれば、党、政府、軍の官僚機構に対する習近平の操作能力の高さを指摘したい。

習近平は、3つの権力主体（党、政府、軍）4つの地方社会（河北、福建、浙江、上海）5つの行政級（県、地区、市、省、中央）での勤務経験をもち、その昇進の階梯を一步步上ってきた。この間、党、政府、軍の内部的な権力の作動メカニズム、政策決定や人事、活動のさまざまな手続き、規則、慣行、さらには党、政府、軍の各組織文化の特徴、所属成員の思考と行動様式に関する共通点や相違点を学習したとみられる。加えて、政治都市の特徴が際立っている首都の北京市のほかに、複数の地方社会での生活を通じ、統治の現場により近い政治感覚も身に着けた。

もっとも、官僚機構の統制に秀でていることは、必ずしも中国政治全体に対するリーダーシップの十全たる発揮を意味しない。この点、地方指導者のキャリアが長いことも、習近平のリーダーシップにとっては、強みであると同時に弱みでもある。

例えば、習近平が複数の土地で務めた地方党委員会書記のポストは、まさしく任地の「王様」であり、当該地域の党や政府の機関のなかに同格の党内序列の幹部は、原則として存在しない。畢竟、構成員の権力関係も、上司と部下というシンプルなものになりやすい。共産党の垂直的な組織系統の一員として、上級からの指示命令の履行と下級への伝達に専念する。これに対し、一時は習近平のライバルと目された李克強のように、北京の中央機関に早くから奉職した者は、所属組織の上下関係だけでなく、北京に所在する他の党機関や中央官庁に勤務する、あまたの同等の位階者を相手に、日夜、協議や折衝の経験を積む。構成員の権力関係も、所属組織を超えて、水平的で複雑な性質を帯びる。

この点、若き日に中央軍事委員会で勤務した数年間を除き、54歳で中央政治局常務委員になるまで、中央機関での業務経験がない習近平は、組織における自己と他者の関係を、上司と部下、指示命令のタテの関係として処理するのが得意な半面（例、ときには部下の反対を押し切って、上位者として迅速果敢な意思決定を行う）、同輩とのビジネスライクなヨコの関係構築に慣れておらず、不得手とみられる。実際、2022年にスタートした3期目の政権では、7名の中央政治局常務委員から、李克強や汪洋などほぼすべての同輩指導者が排除され、集団指導体制が崩壊し、「一人の上司と六人の部下」の関係になった⁽³⁾。

注

(1) 中国語の「現代化」は、社会科学の一般的用語でいうところの modernization、「近代化」を意味する。

(2) 習近平「中国式現代化は強国建設、民族復興の康庄大道（2023年2月7日）」『中共中央弁公庁通迅』2023年第8期、8頁、10頁。

(3) 『日中 個別案件解決を』 垂氏インタビュー 習政権は『一人支配体制』、『読売新聞』2023年年12月29日。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 鈴木隆	4. 巻 第4巻第3号
2. 論文標題 習近平体制の現状と第3期政権の展望	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 安全保障研究	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木隆	4. 巻 93号
2. 論文標題 「内部文献」にみる習近平の保守・愛国・強国	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国際情勢・紀要	6. 最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木隆	4. 巻 92
2. 論文標題 （資料紹介）1987年11月の習近平・岡崎嘉平太の会談について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国際情勢 紀要	6. 最初と最後の頁 23-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木隆	4. 巻 705
2. 論文標題 中華民族の父 を目指す習近平：重点政策と指導スタイルの変化にみる政治発展のゆくえ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国際問題	6. 最初と最後の頁 6-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鈴木隆	4. 巻 652
2. 論文標題 「習近平時代」の政治とは何か？ 理解の見取り図と将来動向の論点：支配体制と指導者像の歴史的定位に基づき	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 東亜	6. 最初と最後の頁 76-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木隆	4. 巻 50
2. 論文標題 中国共産党、「労働者」と訣別する前衛：習近平時代の黨員リクルートと黨員集団	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 問題と研究（日本語版）	6. 最初と最後の頁 1-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鈴木隆
2. 発表標題 「内部発行」資料にみる習近平の政治論と権力への意志（2008～2019年）
3. 学会等名 日本現代中国学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 川島真	4. 発行年 2022年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 352
3. 書名 ようこそ中華世界へ	

1. 著者名 李春利	4. 発行年 2022年
2. 出版社 日本評論社	5. 総ページ数 340
3. 書名 不確実性の世界と現代中国	

1. 著者名 川島真、小嶋華津子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 192
3. 書名 UP plus 習近平の中国	

1. 著者名 川島真、鈴木絢女、小泉 悠、池内恵	4. 発行年 2023年
2. 出版社 P H P 研究所	5. 総ページ数 440
3. 書名 ユーラシアの自画像	

1. 著者名 広島市立大学広島平和研究所	4. 発行年 2022年
2. 出版社 有信堂高文社	5. 総ページ数 280
3. 書名 アジアの平和とガバナンス（第12章「中国のガバナンス」担当）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------